

## 平成26年度学長裁量経費研究推進支援プロジェクト研究成果報告書

### 1. 研究の概要

プロジェクト名	小学校音楽科における楽器を用いた音楽学習と楽器選択の変容		
プロジェクト期間	平成26年度		
申請代表者 (所属講座等)	山中和佳子 (音楽教育講座)	共同研究者 (所属講座等)	無し
取組方法・取組実績の概要	<p>本研究では、小学校音楽科教育の楽器を用いた音楽学習の特質、及び楽器を用いた指導における楽器選択に関する見解について史の変遷と現状を明らかにすることにより、子どもが楽器を使って音を鳴らす音楽行為の教育的意味を指摘することを目的とした。</p> <p>プロジェクト申請時には、大きく分けて①これまで音楽科教育に導入されてきた楽器の特質と、それらの楽器を取捨選択してきた教育現場及び教師の音楽教育的見解を明らかにする＝史的研究と、②現在の楽器指導の実態と教師の意識＝現在の指導実践に関する研究の2つを行うことを計画したが、最終的に①の史的研究を進めることとした。中心的研究課題として日本の学校教育における鍵盤ハーモニカ導入の過程に焦点を当て、鍵盤ハーモニカの日本への導入と開発及び普及の状況、戦前から戦後にわたって導入されたハーモニカから現在使われている鍵盤ハーモニカへの移行の要因、楽器指導における教師の見解、昭和40年代以降の鍵盤ハーモニカ指導の役割を明らかにするために、文書資料及び楽器の蒐集・調査を行った。</p>		
研究成果の概要	<p>①日本では、1959年に輸入された楽器を模倣して1961年以降各楽器会社が競って鍵盤付きのハーモニカを製造しており、キイがボタン式であり両手で演奏するメロディカ系の楽器と、現在の鍵盤ハーモニカに近いクラビエッタ系の楽器が日本で製造されるようになったこと、それぞれが家庭や学校教育での使用を意図していたことがわかった。</p> <p>②学校教育への導入が試みられた1963年ごろは、価格や堅牢性の問題がハーモニカのように全員分の台数を揃えたり個人持ちさせて音楽科授業で使用することを阻んでいた。従って、専らクラブ活動の合奏への導入が主であり、小学校だけでなく中学校でも使用されていた様子が見られた。当時鍵盤ハーモニカはハーモニカや鍵盤楽器（オルガン）の代替楽器として示されていたが、代替としての有効性だけでなく、1968（昭和43）年に告示された学習指導要領音楽編の「基礎」の学習に生かせる楽器として受け止められていたことが明らかとなった。</p> <p>③教科書に初めて学習内容が掲載された1970年の教科書では、低学年のオルガンの学習と3年生からのリコーダーの学習を応用させ運指（鍵盤楽器）→タンギング（吹奏楽器）の流れで学習することが示唆されていた。しかし、1976年の教科書では吹奏楽器としての長所が明確に前面に出されており、鍵盤ハーモニカ独自の面白さを表現するための演奏方法を低学年のうちから学習する構成へと変化したことが明らかとなった。</p> <p>④鍵盤ハーモニカ導入初期の教師の見解からは、「代替楽器」としての位置づけから類似した各楽器の発音原理を比較したことによって、身体操作や楽器が所持している表現能力の違いや楽器の独自性をとらえていた様子が見られた。楽器演奏において、楽器の独自性を踏まえたうえで児童が自ら生み出す音を注意深く聴きながら自分の身体と向き合うことは、筋肉操作や視覚聴覚、触覚といった身体感覚の成長を促すと共に、これらの行為の中で他者との無意識的な身体的共振の経験を重ねることにより意識的な協調にも繋がっていくと考えられる。</p>		
外部資金獲得申請及び研究成果の公表方法等について〔 <input type="checkbox"/> （該当事項）にチェック方願います。〕			
外部資金獲得申請（予定）	<input checked="" type="checkbox"/> 科学研究費補助金 <input type="checkbox"/> 受託研究費 <input type="checkbox"/> その他 ( )	研究成果の公表方法（予定）	<input type="checkbox"/> 学会（国内・国外）： <input checked="" type="checkbox"/> 新聞・図書・雑誌論文等： <input type="checkbox"/> その他：